

## 『詩人主客圖』所收の摘句について

秋谷幸治

### I、はじめに

晩唐の張爲編「詩人主客圖」は、中晩唐の詩人八十四人の摘句を収録した句圖である。摘句を収録するだけでなく、各詩人が「廣大教化」「高古奧逸」「清奇雅正」「清奇僻苦」「博容宏拔」「瑰奇美麗」という六つの流派に分類され、「主」「上入室」「入室」「升堂」「及門」の五層に序列化されている。このような特徴から「近世の詩派の説、殆ど此より出づ（近世詩派之説、殆出於此）」（『直齋書錄解題』卷二十二）というように、詩派のさきがけとみなされた。しかし羅根澤氏が「典型的な句圖ではない」と指摘するように、形式面、内容面ともに雑然としている部分も少なくない。<sup>〔1〕</sup> 例えば、摘句集（句圖）であるにも関わらず、詩をまるごと収録している例が非常に多く、各流派内における摘句の内容も全くといっていいほど統一性が認められないのである。本論では羅氏の指摘をふまえた上で、『詩人主客圖』所收の全摘句のあり方を改めて確認し、どの程度において「典型的」ではないのかを検證したい。

## Ⅱ、句圖とは何か

### ①句圖の特徴

句圖は對句を中心に集めた摘句集であり、特に晩唐から五代、宋代にかけて多く作られた。『四庫全書總目』（卷一九二）<sup>2)</sup>は句圖の名の由來について「排比聯貫、事は譜牒と同じ。故に圖を以て名く（排比聯貫、事同譜牒、故以圖名）」（卷一九二）と説明している。すなわち詩句が系圖のように並んでいるので「圖」と呼ぶ、という。句圖の制作目的について羅根澤氏<sup>3)</sup>は「詩格の目的は作詩方法を提示することにあり、句圖の目的は詩句の模範を提示することにあり、兩者は相い補う關係なのである（詩格的目的在提示作詩方法、詩句圖の目的在提示詩句典型、二者是相輔而行的）」と指摘し、永田知之氏<sup>4)</sup>は「對句が古典中國の文學と切っても切れない關係にある點を反映して、ここでは二句を一單位として詩句が摘まれる。初學者向けの作詩法指南として、句圖は廣範な普及を見たようだ」と指摘している。兩者の指摘に基づけば、句圖は詩句の模範集や初學者向けの作詩指南書として編まれ、讀まれたようである。なお羅根澤氏は句圖が生まれた背景について「五代頃になると、社會狀況や、詩における技巧面が重んじられる傾向を受けて、詩格や詩人秀句・詩句圖も生まれたのである（至五代前後、因了社會的關係、又逼着詩走到藝術技巧一方面、詩格書及詩人秀句或詩句圖、也遂應運而生）」と指摘する。これに加えて、手っ取り早く名作の對句を参照できるといふ特徴から推し量れば、句圖は科學受験の參考書としても讀まれたと推測される。<sup>5)</sup>

### ②唐代から宋代に編まれた句圖

『四庫全書總目』における「摘句にて圖と爲すは、張爲より始まる（摘句爲圖、始於張爲）」（卷一九二）<sup>7)</sup>という指摘

に基づけば、句圖の創始は『詩人主客圖』である。それでは『詩人主客圖』の成書以後に編まれた句圖を確認してみよう。五代から南宋に編まれた目録には次のような句圖が挙げられている。<sup>(8)</sup>

作者／編者	書名	新唐書	崇文總目	祕書省四庫闕書目	通志	直齋書錄解題	宋史	文獻通考
李洞	集賢島詩句圖	○	○		○	○	○	○
太宗眞宗	御選句圖					○		○
惠崇	句圖			○		○		○
倪宥	詩圖	○	○	○	○		○	
黃鑑	楊氏筆苑句圖				○	○		○
不明	續句圖				○			○
強行父	唐杜荀鶴警句圖	○		○			○	
孔道輔	孔中丞句圖					○		○
蔡希蓮	古今名賢警句圖	○					○	
僧定雅	寡和圖	○		○	○		○	
僧惟鳳	風雅拾翠圖			○	○			
不明	林和靖摘句圖	○				○	○	○
不明	雜句圖					○		○

不明	九僧選句圖								
不明	詩林句範			○		○			
高孫似	詩句圖								○

唐代から宋代にかけて、個人の名句（賈島・杜荀鶴・林逋など）を集めた句圖、皇帝の手（太宗・眞宗）による御撰の句圖、詩僧集團の名句を集めた句圖（九僧選句圖）、古今の名句を集めた句圖（古今名賢警句圖）というように、實に様々な句圖が編まれたことが分かる。この中で李洞『集賈島詩句圖』と太宗眞宗『御選句圖』が『吟窓雜錄』卷三十五に、惠崇『句圖』が『青箱雜記』卷九に一部分のみ収録されている。その他の句圖は、基本的に散佚して確認できない。ここでは羅根澤氏が「典型的な句圖（典型的詩句圖）」と評する李洞『集賈島詩句圖』の摘句のあり方を確認してみよう。『吟窓雜錄』卷三十五所収の『集賈島詩句圖』には、以下の十二對句が挙げられている。<sup>10)</sup>

- ① 「吳山は越衆を侵し、隋柳は唐疏に入る（吳山侵越衆、隋柳入唐疏）」（送朱可久歸越中・頸聯）
- ② 「僧は歸る湖里の寺、魚は聽く水邊の經（僧歸湖里寺、魚聽水邊經）」（南臺對月・佚句）
- ③ 「僧は雪夜と同一に坐し、雁は草堂に向かひて聞く（僧同雪夜坐、雁向草堂聞）」（就可公宿・頌聯）
- ④ 「孤鴻は半夜に來たり、積雪は諸峰に在り（孤鴻來半夜、積雪在諸峰）」（寄董武・頸聯）
- ⑤ 「獨り行く潭底の影、數々息ふ樹邊の身（獨行潭底影、數息樹邊身）」（送無可上人・頸聯）
- ⑥ 「雁は過ぐ孤峰の晚、猿は啼く一樹の霜（雁過孤峰晚、猿啼一樹霜）」（送天臺僧・頌聯）
- ⑦ 「老ひて窺ふ明鏡の小さを、秋に憶ふ故山の多きを（老窺明鏡小、秋憶故山多）」（寄正空二上人・佚句）

⑧ 「冢近くして山道に登り、詩隨ひて海船を過ぐ（冢近登山道、詩隨過海船）」（哭孟郊・頸聯）

⑨ 「半句雨を藏するの裏、此の日窗中に到る（半句藏雨裏、此日到窗中）」（晚晴見終南諸峰・頷聯）

⑩ 「養雛は大鶴と成り、種子は高松と作る（養雛成大鶴、種子作高松）」（山中道士・頷聯）

⑪ 「鳥は宿る池邊の樹、僧は敲く月下の門（鳥宿池邊樹、僧敲月下門）」（題李凝幽居・頷聯）

⑫ 「橋を過ぐれば野色を分ち、石を移せば雲根を動かす（過橋分野色、移石動雲根）」（題李凝幽居・頸聯）

いずれも五言律詩における頷聯あるいは頸聯、すなわち律詩の對句部分が摘句として擧げられている。ほとんどの句圖が散佚してしまつた中で、典型的な句圖のあり方を明らかにすることは容易ではないが、二句一對をワンセットにして捉えるという基本的な中國古典詩の考え方に基つけば、①から⑫のような摘句のあり方が羅氏が指摘するように典型的な句圖の形式であつたと考えられる。<sup>⑪</sup>なお荒井健氏は賈島詩の特徴を「同時代の、他の流派の詩人たちのように、視野が廣くはなく、一種の暗い感じのする五言律詩に専念するのみ」とか「特に五言律詩の中樞をなす二組の對句においては、周到に技巧がこらされる（假對、就對、合璧などの對）」と指摘している。<sup>⑫</sup>推敲の逸話に象徴されるような、對句表現に近視眼的なこだわりを見せる賈島詩の特徴は、對句を抜き出して句圖を構成する上で好都合であつたのだろうと思われる。ただし『集賈島詩句圖』に擧げられた摘句は、視覺と聽覺とを對比させた分かりやすい正對（②、③、⑥、⑪）のほかは、いささか單純な合掌對が大部分を占めている。こうした摘句のあり方を見ると、句圖が初學者向けの作詩指南書であつたことが見て取れるだろう。

### Ⅲ、『詩人主客圖』の摘句分析

#### ①『詩人主客圖』は典型的な句圖ではない

續いて本節では『詩人主客圖』の摘句について確認していこう。句圖の創始と目される『詩人主客圖』だが、摘句のあり方は、二句一對を基本とする句圖の形式から逸脱する例が非常に多い。ここでも羅根澤氏の指摘を見てみよう。

『詩人主客圖』は各詩人の下にそれぞれ摘句を並べており（現存するテキストには詩が缺けている部分もある）、詩句圖と同じである。したがって『四庫提要』は『詩人主客圖』の摘句を句圖の創始とみなしているのである。しかし詩句圖は摘句であるからこそ「圖」なのに、『詩人主客圖』は詩をまるごと列挙している場合もある。例えば白居易の項の下には、「讀史」第四首、「秦中吟」第二首、「寓意詩」第一首および第二首が列挙されている。したがって張爲の主眼は流派を明らかにすること、という點をひとまず置いておき、圖詩という點からのみ言っても、『詩人主客圖』は典型的な詩句圖ではない。

每一位詩人之下、都摘列詩句（今本有的詩闕）、和詩句圖相同、所以《四庫提要》認爲是摘句爲圖之始。但詩句圖只是摘句爲圖、此則有時列舉全詩、如白居易下便列舉了《讀史》詩第四首、《秦中吟》第二首、《寓意詩》第一首及第二首。所以姑不論他的用意在講明派別、只就圖詩而言、也不是典型的詩句圖。

詩派を明らかにするために編まれているという點に加えて、詩がまるごと掲載されている例も見られるという點においても『詩人主客圖』は「典型的な詩句圖ではない」と言う。なお『詩人主客圖』は完本として現存しておらず、『唐詩紀事』に引用されている断片しか残っていない。したがって『詩人主客圖』の摘句も『唐詩紀事』に残っている引用から確認する方法しかないのである。<sup>14</sup>そこで次節では、『唐詩紀事』の引用をもとに、『詩人主客圖』における白詩の摘句

のあり方を具體的に見ていこう。

## ②白居易詩における摘句のあり方

『唐詩紀事』の白居易の項（卷第三十八）には、以下のように『詩人主客圖』が引用されている。それぞれ引用されている作品を段落分けにして示すと次のようになる。<sup>15)</sup>

張爲以居易爲廣大教化主、取其讀史詩云、

含沙射人影、雖病人不知。巧言誣人罪、至死人不疑。撥蜂殺愛子、掩鼻戮寵姬。弘恭陷蕭望、趙高謀李斯。陰德既必報、陽禍豈虛施。人事雖可罔、天道終難欺。明卽有刑辟、幽卽有神祇。苟免勿私喜、鬼得而誅之。

又取秦中吟云、

厚地植桑麻、所用濟生民。生民理布帛、所求活一身。身外充征賦、上以奉君親。國家定兩稅、本意在憂人。厥初防其淫、明敕內外臣。稅外加一物、皆以枉法論。奈何歲月久、貪吏得因循。浚我以求寵、斂索無冬春。織絹未成疋、繰絲未盈斤。里胥迫我納、不許暫逡巡。歲暮天地閉、陰風生破村。夜深煙火盡、霰雪白紛紛。幼者形不蔽、老者體無溫。悲喘與寒氣、併入鼻頭辛。昨日輸殘稅、因窺官庫門。繒帛如山積、絲絮如雲屯。號爲羨餘物、隨月獻至尊。奪我身上暖、買爾眼前恩。進入瓊林庫、歲久化爲塵。

又取寓意云、

豫章生深山、七年而後知。挺高二百尺、本末皆十圍。天子建明堂、此材獨中規。匠人執斤墨、探度將有期。孟冬草木枯、烈火燎於陂。疾風吹猛焰、從根燒到枝。養材二十年、方成棟梁姿。一朝爲灰燼、柯葉無子遺。地雖生爾材、

天不與爾時。不如糞上英、猶有人掇之。已矣勿重陳、重陳令人悲。勿悲焚燒苦、但悲採用遲。又取

赫赫京內史、奕奕中書郎。昨傳徵拜日、恩私顧殊常。貂冠水蒼玉、紫綬黃金章。佩服身未暖、已聞竄炎荒。親戚不得別、吞聲泣路旁。賓客亦已散、門前雀羅張。富貴來未久、倏如瓦溝霜。權勢去尤速、譬若石火光。不如守貧賤、貧賤可久長。傳語宦游子、且來歸故鄉。

又取「得意減別恨、半酣輕遠程」之句。又「人吏留不得、直入故山雲」之句。又「長生不似無生理、休向青山學煉丹」之句。又「白髮鑷不盡、根在愁腸中」之句。又與薛濤云、「峨眉山勢接雲霓、欲逐劉郎此路迷。若似剡中容易到、春風猶隔武陵溪」。

ここには「讀史」第四首〔全句〕、「秦中吟」第二首〔全句〕、「寓意詩」第一首〔全句〕、および第二首〔全句〕、「及第後歸觀別諸同年」詩〔二句〕、「郊陶潛體詩」第十二首〔二句〕、二つの不明句〔各二句〕、「與薛濤」詩〔四句〕が収録されている。以下に各詩句の内容をおおまかに確認してみよう。

はじめに諷諭詩の例を見ていこう。「讀史詩」第四首〔0098〕<sup>(16)</sup>では、歴史上に奸臣が多いが「人事は罔ふべきと雖も、天道終に欺き難し」と詠われている。すなわち奸臣は必ず天の報いを受けるものだ、ということである。「秦中吟」重賦〔0076〕では、「貪欲な役人たちによる違法な収奪により、朝廷の庫が「繪帛は山の如く積まれ、絲絮は雲の如く屯す」<sup>たむろ</sup>ほどになっていく様子を描き、當時の農民の苦しみを表現している。「寓意詩」第一首〔0090〕では、山火事で一瞬のうちに灰燼に歸してしまった豫章（クスノキ）の樹に喩えて「地爾の材を生ずと雖も、天爾の時を與へずんば、糞上の英、猶ほ人の之を掇る有るに如かず」と時宜になかった人材登用の大切さを説いている。「寓意詩」第二首〔0091〕



では「富貴は来りて未だ久しからず、倏として瓦溝の霜の如し。權勢は去ること尤も速やかなり、瞥として石火の光の若し」と富貴にあこがれる若者を戒めている。これらはいずれも諷諭詩であり、詩がまるごと引用されている。明らかに前節で確認した『集賈島詩句圖』の摘句のあり方とは大きく異なる。

續いて諷諭詩以外の例について見てみよう。「及後歸觀留別諸同年」〔0210〕では、宴後の別れの様子が「意を得て別れの恨みを減じ、半酣遠程を軽くす」というように描かれている。「郊陶潛體詩」第十二首〔0220〕では、「人吏は留め得ず、直ちに故山の雲に入らん」と隱逸の願望を詠っている。その次に「長生は生理無きに似ざれば、青山に向かひて煉丹を學ぶを休めよ」と仙藥に頼ることを批判した句〔3785〕と「白髮鑷けども盡きず、根の愁腸の中に在ればなり」と老いや愁いを詠った句〔3786〕が収録されている。「與薛濤」詩〔3690〕には、奥深い天臺山に藥を採りに登つて仙女に出會つた劉晨の故事を用いて「若し剡中容易に到るに似たるも、春風猶ほ隔つ武陵溪」と、この上なく艶麗な薛濤に會うことの困難さが詠われている。妓女の薛濤に贈つた艶詩とおぼしい。これら二つの不明句と「與薛濤」詩とは、現存する『白氏文集』には収録されておらず、出處不詳である。<sup>17)</sup>

\*

このように『唐詩紀事』が引く『詩人主客圖』には、白詩の全句が四例、二句の摘句が四例、四句の摘句が一例、というように形式面において全く統一性は認められない。詩型においても五言詩と七言詩、古體詩と近體詩とが混在している。<sup>18)</sup> 加えて収録されている作品の内容も、諷諭詩、留別詩、隱逸詩、艶詩というように、これまた全く統一性がない。さらに言えば『詩人主客圖』の序において「教化廣大」の「主」に位置する白居易だが、諷諭詩以外の五例を見ると、どこが政治教化の役に立つのか全く判然としない。流派名と摘句の關連を容易に見いだせないのである。それでは次に『詩人主客圖』における白詩以外の摘句のあり方を確認してみよう。

### ③全八十四名の摘句のあり方

『詩人主客圖』における摘句のあり方は、白詩以外においても、形式面および内容面において統一性が全く認められない。次に『詩人主客圖』に収録されている全八十四名（うち十二名の摘句は脱落）の摘句のあり方を表にまとめたので、ご覧いただきたい<sup>19)</sup>。

なお「詩題」において「詩闕」と記されているのは摘句が脱落している詩人である。「題闕」と記されているのは題名が残っていない作品であり、これらは詩の冒頭の二字を掲げる。「句」と記されているのは、詩全體は散佚し、當該句のみ現存している作品である。「摘句のされ方」の「【】」には、収録されている摘句の句数を記している。詩がまるごと収録されている場合は全句と記し、部分的に収録されている場合は、8句／3、4というように（をまとめている。句のみ現存している場合は全八句中、三、四句目が収録されている場合は、8句／3、4というように）をまとめている。句のみ現存している摘句は、全何句中の何句目なのかを判別する手立てがないので「未詳」と記す。詩型の別については、ひとまず記さない。

詩人名	No.	詩題	摘句のされ方	詩人名	No.	詩題	摘句のされ方
白居易	1	讀史詩 第四首	【16句】全句	張籍	104	沒蕃故人	【2句】8句／3、4
	2	秦中吟 重賦	【38句】全句		105	薊北旅思	【2句】8句／3、4
	3	寓意詩 第一首	【24句】全句		106	短歌行	【2句】8句／3、4
	4	寓意詩 第二首	【20句】全句		107	樵客吟	【3句】16句／14、16
	5	及第後歸觀留別諸同年	【2句】12句／9、10	楊巨源	108	題闕（何事）	【8句】全句

盧全			元稹			羊士諤					張祜	楊乘				
	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6
詩闕	逢白公	題闕·句 (兒歌)	感興	題闕·句 (塵沙)	題闕·句 (桂朽)	歷山·句	感春申君	桂杖	葛溪	秋晚·句	上令孤相公·句	甲子歲書事	與薛濤	題闕·句 (白髮)	題闕·句 (長生)	郊陶潛體詩 第十二首
	【4句】全句	【2句】未詳	【2句】4句／3、4	【8句】未詳	【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】4句／3、4	【2句】8句／5、6	【2句】4句／3、4	【2句】未詳	【2句】未詳	【32句】全句	【4句】未詳	【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】24句／11、12
	賈島	任蕃			馬載			方干				姚合		僧無可		楊敬之
125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109
亦贈吳處士	贈吳處士 <sup>(20)</sup>	惜花	塞下曲第一首	夕次淮口	楚江懷古	貽天目中降客·句	桃花塢周處士別業	寄李頻	從軍樂第二首	送顧非熊下第歸越	劍器詞第一首	武功縣中作第四首	寄題廬山二林寺	新年	題闕·句 (碧山)	題闕·句 (霜樹)
【2句】8句／5、6	【2句】8句／1、2	【2句】4句／1、2	【2句】8句／7、8	【2句】8句／3、4	【4句】8句／1、4	【2句】未詳	【4句】8句／5、8	【8句】全句	【2句】8句／5、6	【2句】8句／3、4	【2句】8句／3、4	【2句】8句／5、6	【2句】40句／11、12	【2句】8句／3、4	【2句】未詳	【2句】未詳

祝天膺		周光範		施肩吾				殷堯藩		皇甫松	費冠卿	沉亞之				顧況
36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26			25	24	23	22
送高遂赴舉	賀朱慶餘及第·句	投白公·句	及第後過揚子江	題闕·句(年來)	下第東歸作	送沉亞之尉南康	館娃宮	宮詞	勸僧酒	登郭隗臺	詩闕	詩闕	小孤山	題闕·句(頽垣)	題闕·句(巫峽)	題闕·句(汀洲)
【6句】全句	【2句】未詳	【2句】未詳	【8句】全句	【2句】未詳	【2句】8句／5、6	【2句】8句／3、4	【4句】全句	【8句】全句	【4句】全句	【4句】全句			【2句】4句／3、4	【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】未詳
					藩誠	僧良乂	薛濤					項斯	厲元			
141	140	139	138	137	136	135		134	133	132	131	130	129	128	127	126
題闕·句(秋深)	題闕·句(行人)	長安	題闕·句(心已)	題闕·句(僧老)	送人遊蜀·句	秋山答盧鄴	詩闕	遠水	曉發昭應	古意·句	題闕·句(馬蹄)	庾樓燕·句	從軍行	旅遊	早秋寄題天竺靈隱寺	憶江上吳處士
【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】4句／3、4	【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】未詳	【4句】全句		【1句】8句／4	【2句】8句／5、6	【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】未詳	【8句】全句	【2句】8句／3、4	【2句】8句／5、6	【2句】8句／3、4

李賀				韋應物			孟雲卿	童翰卿	陳標	朱可名			徐凝			
53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37
上雲樂	寄楊協律	秋夜寄邱二十二員外	詠聲	寄全椒山中道士	悲哉行	苦雨·句	感懷·句	絕句	寄友人	應舉目寄兄弟	答白公	題闕·句(試到)	別白公·句	題闕·句(霧紋)	夢仙詞	寄道友
【1句】9句／1	【2句】8句／5、6	【2句】4句／3、4	【4句】全句	【2句】8句／5、6	【14句】全句	【2句】未詳	【2句】未詳	【4句】全句	【4句】全句	【8句】全句	【4句】全句	【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】未詳	【4句】全句	【4句】全句
	孟郊		朱慶餘				愈梟		僧志定		衛準		詹雄			于武陵
158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142
贈別崔純亮	大梁送柳淳先入關	題王侯廢宅	送陳標	秋日將歸長安留別 王尙書	酬王檀見寄	題闕·句(滄洲)	題闕·句(顏凋)	題闕·句(梧桐)	題闕·句(惟有)	題闕·句(何必)	題闕·句(莫言)	銅雀臺·句	洛陽古城·句	送客東歸	尋山	東門路詩
【2句】32句／1、2	【2句】8句／1、2	【8句】全句	【4句】全句	【2句】8句／3、4	【2句】8句／5、6	【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】8句／3、4	【2句】8句／3、4	【2句】8句／3、4

李觀		胡幽貞		李涉			劉猛			李餘			杜牧			
	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54
詩闕	歸四明	題西施浣紗石	懷古	六歎第三首	曉	苦雨	月中	題闕·句(嘗憂)	題闕·句(霽後)	題闕·句(長安)	早雁詩	長安送友人遊湖南	長安雜題長句第一首	池州送孟遲先輩	楊生青花紫石硯歌	秦王飲酒
	【4句】全句	【4句】全句	【8句】全句	【2句】12句／7、8	【4句】全句	【8句】全句	【10句】全句	【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】8句／3、4	【2句】12句／7、8	【2句】8句／7、8	【2句】96句／19、20	【1句】10句／2	【1句】15句／8
	劉禹錫	武元衡	張爲	司馬退之	李羣玉			鮑溶	李溟		劉得仁		周朴		陳陶	
171	170					169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	159
題闕·句(湖上)	寄白公·句	詩闕	詩闕	詩闕	詩闕	秋懷·句	上太原王尙書	途中	無題	宿宣義池亭	雲門寺	題闕·句(高情)	題闕·句(高陵)	題闕·句(比屋)	題闕·句(蟬聲)	獨愁
【1句】未詳	【2句】未詳					【2句】未詳	【4句】28句／3、6	【4句】16句／13、16	【8句】全句	【1句】8句／1	【4句】8句／3、6	【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】6句／3、4

		李益	韋楚老	陳潤			孟遲			劉駕		曹鄴		李宣古		賈馳
87	86	85	84	83	82	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70
從軍有苦樂行	五城道中	題闕·句(閒庭)	天上行·句	題闕·句(丈夫)	過驪山	垓下·句	廣陵城	古意	古出塞	早行	杏園卽席上同年	讀李斯傳	題闕·句(翠蓋)	題闕·句(冉冉)	題闕·句(東風)	秋入關
【1句】36句／24	【2句】18句／11、12	【2句】未詳	【2句】未詳	【4句】14句／1、4	【4句】全句	【2句】未詳	【4句】全句	【8句】全句	【2句】12句／11、12	【4句】8句／1、4	【20句】全句	【4句】10句／5、8	【2句】未詳	【4句】未詳	【2句】未詳	【6句】全句
		許渾	陳羽		盧蘋				曹唐	長孫佐輔				趙嘏		
187	186	185		184	183	182	181	180	179	178	177	176	175	174	173	172
秦樓曲	陳宮怨第一首	故洛城詩	詩闕	題闕·句(一朵)	題闕·句(春淚)	題闕·句(誰知)	題闕·句(一曲)	仙都卽景九	遊仙·句	傷故人歌伎	送人尉江都	寒食新豐別友人	題闕·句(梁王)	錢塘·句	聽琴	無題
【2句】4句／3、4	【2句】4句／3、4	【2句】8句／3、4		【4句】8句／5、8	【4句】8句／1、4	【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】8句／7、8	【2句】未詳	【4句】全句	【2句】8句／3、4	【2句】8句／3、4	【2句】未詳	【2句】未詳	【4句】全句	【8句】全句

	楊洵美	于鵠				李宣古					僧清塞		劉畋		蘇郁		
	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	
	答李昌期	題闕・句(暮鴉)	古挽歌	題闕・句(血染)	題闕・句(溢浦)	題闕・句(自然)	寒月聯句・句	出關寄賈島	送幻群法師	早秋過郭涯書堂	送耿山人歸湖南	賀集送耿山人	雨後	晚泊漢江渡	題闕・句(吟倚)	步虛詞	
	【12句】全句	【2句】未詳	【2句】24句／3、4	【2句】未詳	【1句】未詳	【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】8句／5、6	【2句】8句／5、6	【2句】8句／3、4	【2句】8句／5、6	【2句】8句／3、4	【2句】未詳	【8句】全句	【2句】未詳	【4句】全句	
							袁不約	周祚	雍陶	章孝標	張陵		張簫遠				
							196	195	194		193	192	191	190	189	188	
							客去・句	深秋・句	不明句(莫道)	詩闕	宮詞	詩闕	乳石洞玉女祠・句	廢城・句	題闕・句(秦雲)	贈高處士	傷故湖州李郎中
							【2句】未詳	【2句】未詳	【4句】全句	【4句】全句	【4句】全句	【1句】未詳	【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】未詳	【2句】8句／3、4	【2句】8句／5、6
126例	2句の摘句																
46例	全句の摘句																
9例	1句の摘句																
71例	句のみ現存																



『詩人主客圖』に収録されている全八十四名、全一九六例の摘句のあり方について、氣づいた點をまとめてみよう。

【詩闕】全八十四人の詩人のうち十二人（盧仝、沉亞之、費冠卿、李觀、薛濤、李羣玉、司馬退之、張爲、武元衡、陸羽、張陵、雍陶）の摘句が缺けている。編者の張爲の摘句も缺けている。もともと摘句を収録していなかったのか、流傳の過程で脱落してしまったのかは判別できないが、『詩人主客圖』が句圖であることを鑑みれば、摘句脱落の理由は後者であろうと考えられる。

【二句の摘句】全一九六例中、二句の摘句は一二六例ある。これは全例の六割以上に相當するわけであるから、『詩人主客圖』の摘句は、概ね二句一對を基調としていることが分かる。しかし一方で二句一對から逸脱した例も、見逃せないほど大量に認められる。

【全句の摘句】詩をまるごと収録している例は、四十六例認められる。例えば白居易「讀史詩」第四首（全十六句）、「秦中吟」重賦（全三十八句）、「寓意詩」第一首（全二十四句）、「寓意詩」第二首（全二十句）、楊乘「甲子歲書事」（全三十二句）、孟雲卿「悲哉行」（全十四句）、曹鄴「杏園即席上同年」（全二十句）は、長編の古體詩をまるごとそのまま収録している。これらは前節で確認したように李洞『集賈島詩句圖』の摘句のあり方と明らかに大きく異なる。句圖でありながら『詩人主客圖』には詩をまるごと収録している例が驚くほどに多い。

【二句の摘句】一句のみを摘句に擧げているものも九例認められる。特筆すべきは李賀の摘句は、「飛香芝紅滿天春（飛香芝紅滿天春）」（上雲樂）、「酒酣にして月を喝し倒行せしむ（酒酣喝月使倒行）」（秦王飲酒）、「天を踏み刀を磨きて紫雲を割く（蹋天磨刀割紫雲）」（楊生青花紫石硯歌）というようにすべて一句である。このような摘句のあり方は、二句一對を摘句にする句圖の基本的な考え方から根本的に逸脱している。

【句のみ現存】句のみしか現存していない摘句が、七十一例ある。これらは基本的に『詩人主客圖』でしか確認でき

ない佚句であり、その数は全例の三割以上に當たる。特に羊士諤（三摘句）、周光範（二摘句）、童翰卿（一摘句）、李餘（三摘句）、李宣古（二摘句）、盧休（四摘句）、楊敬之（二摘句）、詹雄（二摘句）、衛準（二摘句）、僧志定（二摘句）の摘句は、すべてがこうした佚句である。前稿で指摘したように『詩人主客圖』は、官界で活躍できなかった下層士大夫をクローズアップした句圖であり、後世にほとんど詩作を残せなかつた無名詩人の作品も多く収録されている。したがって『詩人主客圖』に残る摘句は、下層士大夫や無名詩人の作品のあり方を知る手がかりであり、中國文學史の空白を埋める貴重な資料と言えよう。なお白居易（二摘句）、元稹（二摘句）、劉禹錫（二摘句）というように、中唐の代表詩人においても、『詩人主客圖』でしか確認できない佚句が確認でき、これらも注目すべきものである。清の李調元の「即ち引く所の諸人の詩は、亦た其の集中の傑出なる者に非ず（即所引諸人之詩、亦非其集中之傑出者）」（『函海』所收の李元調による『詩人主客圖』の序）という指摘は、こうした『詩人主客圖』の摘句のあり方を的確に言い表したものである<sup>21</sup>。えよう。

\*

以上のように『詩人主客圖』は、詩をまるごと収録している例が大量に認められ、李賀詩のように一句のみを取った摘句もある。羅根澤氏は『詩人主客圖』を「典型的な句圖ではない」と指摘していたが、その摘句のあり方を一つ一つ検証すると、そもそも句圖と呼ぶものか、という疑問を懐かせるほどに句圖の形式から逸脱していると言える。

先に記したように現存する『詩人主客圖』は、南宋の計有功の編による『唐詩紀事』に引用されることによつて後世に傳わつたものである。これらの事情について『四庫全書總目』には「唐人の詩集世に傳はらざる者は、多く是の書に頼りて以て存す。其の某篇某集の取る所と爲る者は、極元集、主客圖の類の如し、亦た一一詳しく註す。今姚合の書は猶ほ存せり。張爲の書も獨り此の編を藉りて以て梗概を見ゆ（唐人詩集不傳於世者、多賴是書以存。其某篇爲某集

所取者、如『極元集』、『主客圖』之類、亦一一詳註。今姚合之書猶存。張爲之書獨藉此編以見梗概」(卷一九五)と説明されている。<sup>(22)</sup>すなわち現存する『詩人主客圖』は『唐詩紀事』に引用される「梗概」に基づいて復元されたものであり、もとの摘句の形式をそのまま傳えているとは限らないのである。なお『祕書省四庫闕書目』に總集と目される『唐詩主客集』という佚書の存在が認められ、『詩人主客圖』と何らかの關連があつたものと想像もできるが、現存する資料からはその全貌を明らかにすることは不可能である。<sup>(23)</sup>

#### IV、おわりに

『唐詩紀事』に引用されている『詩人主客圖』の摘句は、詩をまるごと収録している例が四十六例も存在し、典型的な句圖の形式から大きく逸脱している。もつとも『詩人主客圖』が批判されながらも後世に讀み續けられた理由は、最古の詩派圖と見なされたからである。したがって注目されたのはあくまで、中晩唐の八十四人を六つの流派に分け、五層にランク附けた序の部分であつた。これに對して摘句については、ほとんど無視されてきたのである。しかし本論で確認したように、『詩人主客圖』は佚句を七十一例も収録しており、この點においても貴重な資料の源であるとも言える。『詩人主客圖』に収録されているこれらの佚句は、むろん僞作の可能性もあり、詳細な検討も必要である。これらの検討結果については稿を改めて發表したい。

#### 注

(一) 『詩人主客圖』の基本的な特徴や後世による批判については、拙稿『詩人主客圖』の流傳に關する一考察」(『汲古』第七七號

- (1) 二〇二〇年、『詩人主客圖』の制作背景について（『大東文化大學漢學會誌』第六十號、二〇二一年）を参照。
- (2) 『四庫全書總目』（中華書局、一九八一年）を参照。
- (3) 羅根澤『中國文學批評史』（上海書店出版社、二〇〇三年）（五一七頁）（初版は一九四三年）を参照。
- (4) 永田知之『理論と批評―古典中國の文學思潮』（臨川書店、二〇一九年）（二四五頁）を参照。
- (5) 前掲（3）注書（五一七頁）。
- (6) なお晩唐詩は警句の寶庫であることについて村上哲見氏は「一般的にいつて晩唐の詩は、杜甫のように作品の全體がずっしりと胸にこたえるような作品は多くないが、パツと一目を惹くような魅力的な句、いわゆる警句（警策・警拔の句）はいくらも見いだすことができる」や「しかし中唐、さらに晩唐になると、そうした先輩たちの成果を意識し、何とか一味違ったものと工夫を凝らすようになる。晩唐の詩に一、二の警策の句をもって評判になるものが多いのはそうした趨勢の結果であろう」と指摘している（村上哲見『唐詩』講談社學術文庫、二〇〇一年）（二八七頁）を参照。晩唐において警句が大量に生まれたことも、句圖の流行と何らかの關連があるものと思われる。
- (7) 前掲（2）注書を参照。
- (8) 表を作成するに當たつては、前掲（3）注書（五二一〜五二八頁）を参照し、かつ以下の各目録を確認した。  
『新唐書』（宋）歐陽脩、宋祁撰、中華書局、一九七五年版。  
『崇文總目』（宋）王堯臣撰、（清）錢東垣等輯釋、『中國歷代書目叢刊』本、現代出版社、一九八七年版。  
『祕書省四庫闕書目』宋紹興、中改定、葉德照考證、『中國歷代書目叢刊』本。  
『通志』（宋）鄭樵撰、浙江古籍出版社影印本、一九八八年版。  
『直齋書錄解題』（宋）陳振孫撰、『中國歷代書目叢刊』本。  
『宋史』藝文志（二）脱脫等撰、中華書局、一九七七年版。  
『文獻通考』（元）馬端臨撰、中文出版。
- なお『詩人主客圖』以前に『瑠璃堂墨客圖』という句圖が存在するがここではひとまず割愛する。さらに句圖が成立する前に元競「古今詩人秀句」、褚亮「古文章巧言語」、玄鑑「續古今詩人秀句」、王起「文場秀句」、黃滔「泉山秀句集」、李商隱「梁詞人麗句」といった秀句集も存在し、句圖と深い關係にあると思われるが、これらもここではひとまず觸れない。
- (9) 『詩人主客圖』の編者である張爲も詩僧との交流が深い詩人であった。してみると句圖制作は詩僧グループと何らかの結びつき

- があることが豫想される。このことについては、拙論『詩人主客圖』の制作背景について』（『大東文化大學漢學會誌』第六十號、二〇二一年）の注（18）を参照。
- (10) 陳應行編・王秀梅整理『吟窓雜錄』（中華書局、一九九七年）（二〇〇二頁）を参照。②と⑦とは、句のみしか現存していない佚句なので、詩題のみ掲げる。なお②は下句が二四不同になっておらず、古體詩である可能性もある。
- (11) 『詩人主客圖』の制作年代よりも時代が下る例となるが、太宗眞宗「御選句圖」においても七言詩の二句一對が五例（「江行」「寒食」「僧舍」「嘉陽川」「宿東林」、五言詩の二句一對が三例（塞上」「湘江舟行」「哭江）」採られている（陳應行編・王秀梅整理『吟窓雜錄』中華書局、一九九七年）（二〇〇〇頁）を参照。この例から見ても句圖は、基本的には二句一對の摘句を採るものであったことが伺える。
- (12) 荒井健『秋風鬼雨——詩に呪われた詩人たち』（筑摩書房、一九八二年）（二一六頁）（二二〇頁）を参照。
- (13) 前掲（3）注書（五一九頁）。
- (14) なお『詩人主客圖』は『榕園叢書』、『歷代詩話續編』、『鏡烟堂十種』、『談藝珠叢』、『豫章叢書』（附清袁寧珍輯『圖考』）、『負暄雜錄』などの叢書にも収録されている。これらは基本的にいずれも『唐詩紀事』に引用されている『詩人主客圖』を再録したものである。
- (15) 南宋・計有功撰、王仲鏞校箋『唐詩紀事校箋』（巴蜀書社、一九八九年）（二〇二六頁）を参照。本論における『詩人主客圖』の引用は、基本的にこの書に依據する。なお檢索等の作業においては、データベースサイト「中國哲學書電子化計畫」も使用した。
- (16) 作品番號は花房英樹『白氏文集の批判的研究』（彙文堂、一九六〇年）の「總合作品表」による。解釋に當っては岡村繁『白氏文集』（明治書院）を参照した。
- (17) 「與薛濤」詩は偽作である可能性もある。例えば謝思煒氏は、「與薛濤」詩について「此の外薛、白は來往の迹無し。此の詩の眞偽も亦た確知し難し（此外薛、白無來往之迹。此詩眞偽亦難確知）」と指摘している（謝思煒撰『白居易詩集校注』中華書局、二〇〇五年）（二九〇三頁）を参照。
- (18) 『詩人主客圖』が収録する白詩の摘句の詩型をまとめると以下のようになる。「讀史」第四首（五言古詩）、「秦中吟」第二首（五言古詩）、「寓意詩」第一首、第二首（五言古詩）、「及第後歸觀留別諸同年」詩（五言古詩）、「郊陶潛體詩」第十二首（五言古詩）、二つの不明句（七言詩、古體詩か近體詩かは不明）、「與薛濤」（七言絶句）。
- (19) この表は、『唐詩紀事』に引用されている『詩人主客圖』の摘句と『全唐詩』とを照らし合わせて作成している。詩題において

文字の相違がある場合は、『詩人主客圖』の詩題に従っている。なお『全唐詩』の検索に当たってはデータベースサイト「寒泉」を使用した。

(20) 92と93、124と125、183と184は同作品である。同作品から摘句を二カ所取っている。

(21) 清・李調元輯『函海』第三函（宏業書局、一九六八年版）を参照。

(22) 前掲（2）注書を参照。

(23) 『秘書省四庫闕書目』には、編者不明で現在は散佚してしまった『唐詩主客集』という總集が記載されている。また『崇文總目』『秘書省四庫闕書目』『通志』『宋史』にも同じく佚書である『前輩題詠集』という總集が記載されている。これらは『詩人主客圖』と何らかの関係があつた總集であつたと豫想される。